

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

「滅びの山を求めて」：裏返しの聖杯探索

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): The Lord of the Rings, the Quest of the Holy Grail, Tolkien 作成者: 小路, 邦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1042

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「滅びの山を求めて」－裏返し of 聖杯探索－

‘The Quest of Mountain Doom’ – The Quest of the Holy Grail Reversed

小 路 邦 子

SHOJI, Kuniko

Analyses *The Lord of the Rings* and shows that this work can be seen in the light of the Quest of the Holy Grail. Points out the common features between them. Explains how quests become the Quest; Sam grows from a fool to a wiseman like Percival does and attains his part in the Quest; Frodo comes to know pity and how it helps the achievement of the Quest, and then his unhealed wounds reveal that Frodo is a Maimed King as well. Frodo, however, has no Galahad or Percival who cures his wounds, so he must sail from the Middle-earth with his wounds like King Arthur, and the recovery of the Shire becomes Sam's work, thus Sam fills the part of Percival and becomes the Mayor just like Percival is enthroned designated by the Grail.

キーワード：『指輪物語』、聖杯探索、トールキン

Key words : *The Lord of the Rings*, the Quest of the Holy Grail, Tolkien.

I. ‘quests’ から ‘the Quest’へ

フロドが〈一つの指輪〉を捨てて行く仲間との正式な旅は、裂け谷のエルロンドにより ‘the Quest of Mountain Doom’ (II.268) と表現されて始まる¹。しかし、同時に ‘the Quest’ という言葉はこのように大文字で表現された場合、別の旅を我々の脳裏に呼び起こす。すなわち聖杯探索 the Quest of the Holy Grail である²。だが、聖杯探索が「見つけどす」ための旅であるのに対し、一行の旅は「捨てる」ための旅である。しかもそれはフロドがいみじくも言う通り「逃げてまわる旅」なのである。‘This is no treasure-hunt, no there-and-back journey. I am flying from deadly peril into deadly peril.’ (I.106) そして、

この旅はその観点からみてまさしく裏返し of 聖杯探索と言えるのではなかろうか³。

大文字・小文字を問わず、‘quest’ という言葉が最初に現れるのは、ガンダルフがフロドに指輪の来歴を語ったあと、これを「滅びの罅裂^{きれつ}」Cracks of Doomに投げ込んで破壊しなくてはならないと言ったときである。フロドは ‘I am not made for perilous quests.’ (I.66) 「わたしは危険きわまる探索の旅をするようには生まれついていないんです」(1.138) と言う。ここでの「探索」は ‘quests’ と小文字で複数形が使われている。まだフロドにとってはこの旅はいくつもあるであろう探索の旅の一つでしかない。しかし、その直後に受け取って欲しいと差し出した指輪をガンダルフは頑強にはねつける。かくし

てフロドは自分が出て行かなくてはならないと覚悟を決める。それによりガンダルフによって‘that quest’（I.71）と単数形になる。‘It may be your task to find the Cracks of Doom; but that *quest* may be for others.’こうしてこの旅はとりあえず彼のものとなるが、まだ普通名詞でしかない。故に、「それは他の者の仕事になるかもしれぬ」（I.149、斜体、傍点は筆者による）と訳されている。また、この時点ではフロドもガンダルフも最後まで彼が成し遂げる旅であるという確信はもっていない。とりあえず裂け谷を目指すという所までしか二人とも先が見えてはいない。実際フロドは裂け谷に着いたことで自分の役目は終わったと思っていた。しかし、結局彼は半ば諦めの気持ちをもって自発的に指輪を捨てる旅に名乗りを揚げ、先に挙げたエルロンドの宣言によって‘the Quest’という特別なものになるのである。

次に‘quest’が出てくるのは、ファラミアと話をしているフロドがこの探索と指輪についてだけは触れようとしないという時点で、‘the quest of the Company’（IV.356）と表わされている。旅の仲間は特別な者だが、その探索の真相を明かすことのできないフロドにとり、これは普通名詞の「探索」でなくてはならないのだ。五度目はサムがフロドが死んだと思い、彼の代わりに指輪を引き受けて旅を続けようとする時に使われる。‘...Sam was convinced at last that Frodo had died and laid aside the Quest.’（IV.429）ここではサムにとり、フロドの旅は志半ばにして潰えた特別な旅となる。ところが、フロドが生きていたと知ったとたんに、サムは自分が引き受けたその特別な探索‘the Quest’（IV.433）を放り出してしまう。彼の探求は主人を助け

出すことに変わる。塔の中で主人を見い出したサムにフロドは‘The quest has failed, Sam.’（VI.224）と言う。すべてを奪われたと思っているフロドにはまたも潰えた旅となり、それはもう一般論でしか語るることのできないものとなった。しかし、最後にとうとう捨てる旅を成就したフロドは言う。‘For the Quest is achieved, and now all is over.’（VI.271）こうして遂に探索は彼のみならず、すべての者にとって特別な旅となった⁴。

II. 聖杯と指輪

ここで、聖杯探索とはいかなるものかを見ておきたい。そもそも聖杯とは、最後の晩餐でイエスが用い、後に磔刑のキリストの流れる血を集めた器とされる。その後、イエスの遺骸を墓に納めたアリマタヤのヨセフがその杯を貰い受けた。彼はそのため、ユダヤ人に捕らえられ監禁されるが聖杯の力により命を長らえる。40年後のエルサレムの占領破壊により解放されたヨセフは⁵、聖杯を捧持して、一族と共に艱難辛苦の末に西方に齎した。そのたどり着いた約束の地は、「アヴァロンの谷」⁶すなわちグラストンベリとされ、ヨセフの一族は聖杯の守護者として聖杯城で聖杯を守護する。

この聖杯がアーサー王の時代に円卓に出現し、円卓の一同に食事を供した後消えてしまった。ガウエインは探索の開始を誓って、円卓の騎士たちによる聖杯探索が始められた。しかし、地上でいかなる栄誉ある騎士といえども、肉体的な穢れのない無垢の身でなければ聖杯を見ることもその真実を知ることでもできず、空しく探索途上で命を落とす。この探索に成功するのは、地上で最高の騎士の一人であるラーンスロットではなく、その息子で

聖杯王の血を引くガラハドである。彼は世俗の汚濁とは無縁な純潔の天上の騎士である。また、彼に次いで身を清く保っていたパーシヴァルとボルスとの3人のみが聖杯の探索を成就する。パーシヴァルもしくはガラハドは探索の途中で、折れた剣をつなぎ合わせるという試練も成し遂げる。ガラハドはサラスの王として戴冠して1年後に、生身の身で聖杯の神秘を見て魂を天に召される。それと同時に天から伸びてきた一本の手が、聖杯と聖槍を天へ運び去り、以後聖杯が現れることはなかった。その後、パーシヴァルとボルスは庵を結んで暮らしたが、パーシヴァルが死ぬとボルスはアーサーのもとに戻り、聖杯の奇蹟を語った。

こうしてただ3人だけが、聖杯の探索を成し遂げ、王妃との道ならぬ関係を持つランズロットにはその神秘は開かれなかった。しかし、彼は世俗の最高の騎士として一部だけを覗き見ることはできた。だがそれは聖杯が出現した時に、半覚醒の状態で身動きもならぬという不名誉な状況の下でしか許されない。また、気の触れたランズロットを癒してくれたのも聖杯である。彼はすぐそばまで行き、何度か目撃しながらも、罪のために最後の神秘を垣間見ることはできなかった。

さらにまた、聖杯はケルトの豊穡の釜や再生の釜に遠源を持つともされている。

では、このような聖杯探索と指輪の旅がどのように照応しているかを見てみたい。

1) その力は、望みのものを与える

聖杯：好きな食べ物を心行くまで与えてくれる。

指輪：他のすべての指輪を支配し、すべてを見つけ、闇につなぎとめる力を持つ

つ。その持主の器量に応じた力を与える。‘The ring had given him power according to his stature.’ (I.59).

2) それを己のものとした者は、この世を去る

聖杯：ガラハドは聖杯の神秘を知り、天へ召されていく。

指輪：自己のものとするうちに指輪の力の虜となり、幽鬼になる。サウロンの軍門に下るのは死と同じだが、こちらの行く先はいわば地獄である。

3) それによって異常な長寿を得る。

聖杯：アリマタヤのヨセフおよび漁夫王／不具王（またはその父）は、聖杯によって齎される聖体のみでとてつもない長い時を生きている。また、ヨセフはサラスの街でイーヴレイクという王を改宗させたが、王は聖杯のそばにいたいと望んで神に疎まれ、盲目にされた。しかし、王は自分の子孫にあたる騎士が聖杯探索を成就するまで生かして欲しいと願い、聖体により400年間生きてきた。

指輪：長きに亘って所有していたゴラムは500年以上も生きている⁷。ガンダルフの知りえたところでは：

‘And I learned also that he had possessed it long. Many lives of his small kind. The power of the ring had lengthened his years far beyond their span; but that power only the Great rings wield.’ (I.243-44)

ビルボも‘Thin and stretched’ (I.54)「薄く引き伸ばされ」(I.105)、ホビットとしてはかなりの長寿である131才になるまで中つ国にあった。ガンダルフは言う：

‘A mortal, Frodo, who keeps one of the Great Rings, does not die, but he does not grow or obtain more life, he merely continues, until at last every minute is a weariness.’ (I.53).

4) 失われて再び出現する

聖杯：アーサー王の宮廷に出現したのち、最終的にガラハドの死によって天に運び去られるまで何度かその姿を現わし、傷ついた者たちを癒した。

指輪：サウロンの指から失われた後、イシルデュアの指からも大河の中で抜け落ち、その後デアゴルにより拾われるが、スメアゴル＝ゴラムに奪われる。更にゴラムが失くしてビルボの前に現れる。(I.58-59)

5) 出現する相手を選ぶ

聖杯：ガラハドは探索を成就する。パーシヴァルとボルスも聖杯の祝福を受ける。ラーンスロットは俗世の罪のために垣間見るだけで終る。やはり優れた騎士であるガウェインには現われない。

指輪：冥王のもとに戻るために、重さや寸法まで自在に変わって持ち主から逃げる。ゴラムから逃げて、ビルボに発見される。

‘It may slip off treacherously, but its

keeper never abandons it.’

‘The Ring itself that decided things. The Ring left *him*.’

‘The Ring was trying to get back to its master.’ (I.61).

6) 姿の見えない運び手

聖杯：姿の見えない捧持者により、運ばれてくる。

指輪：これをはめるとこの世の者たちには姿が見えなくなる。しかし、逆に幽鬼たちには探知されやすい。

‘And if he often uses the Ring to make himself invisible, he *fades*; he becomes in the end invisible permanently, and walks in the twilight under the eye of the dark power that rules the Rings. Yes, sooner or later -- later, if he is strong or well-meaning to begin with, but neither strength nor good purpose will last -- sooner or later the dark power will devour him.’ (I.53).

7) その探求により、引き起こされる災い

聖杯：探求にでた騎士の多くが命を落とした。円卓の崩壊への序曲となる。

指輪：存在そのものが、不安をかき起こすものである。また、サウロンの手に入ったなら、その力により、エルフの3つの指輪も無事では済まない。ボロミアは指輪の力に負けた犠牲者の一人である。“The Ruling Ring” (II.249, 256, 257) を欲しがらるボロミアは傲慢と貪欲の罪を犯している。

'Why should we not think that the Great Ring has come into our hands to serve us in the very hour of need? Wielding it the Free Lords of the Free may surely defeat the Enemy.' (II.256)

8) 実体がなく精神体のみのサウロンの消滅は、十字を切った時に滅ぼされる悪魔の消滅に似ている。パーシヴァルは美しい女性（実は地獄の魔王で、すべての悪魔に対する支配力を持っている）の言うがままに同衾しようとした時に、剣の柄についている十字架により、以前に老司祭と交わした約束を思い出し、十字を切る。とたんに、大天幕は引っくり返り煙りと黒い雲に変わった。さらに、*The Lord of the Rings* で使われている 'The Enemy' とは、キリスト教では悪魔をさす言葉である。そもそもサウロン自体、初めからこのような悪だったのではない。ヌメノールの王アル=ファラゾンと中つ国の覇権を争い捕虜になって、かの王の心をたぶらかした。しかし、ヌメノールの水没の巻き添えをくって肉の形を失い、憎しみの幽鬼と化す (Appendix A, 384-85)。「かれは人間の目に立派だとうつる姿をとることはもう二度とできず、真黒な見るもおぞましい者となり果て、それから後、かれの力は恐怖を通じてのみ発揮されることとなった。」(旧版 6. 258) このあたりも輝かしい天使であったルシフェルが天から落とされ、悪魔となっていく過程と似ている。さらに、パーシヴァルを騙そうとした上記の魔王のことを読み替えれば、指輪にそっくりあてはまるであろう。すなわち、「モルドールの指輪の王は、すべての指輪に対する支配力を持っている。」⁸⁾

Ⅲ. 3 という数

ところで、指輪を捨てるための探索の一行は全部で9人である。この人数は、エルロンドが9人の乗り手（指輪の幽鬼／ナズグル／黒の乗り手）に対応する数として選んだと述べている。'The Company of the Ring shall be Nine; and the Nine Walkers shall be set against the Nine Riders that are evil' (II.263). 'Riders' 「乗手」に対して 'Walkers' 「徒歩の者」(3.146) という対照がなされている。しかしまた、'The Nine Walkers' という語は中世を知るものには 'the Nine Worthies' を思い起こさせるにふさわしい音の響きを持っている。'The Nine Worthies' 「九偉人」とは、キャクストンもマロリーの『アーサーの死』を出版するにあたり序文でその名を挙げているが、以下の9人を指す。まず異教徒のトロイアのヘクトル、アレクサンダー大王、ジュリアス・シーザー、次いでユダヤ人のヨシュア、ダビデ王、ユダ・マカベウス、最後にキリスト教徒であるが、アーサー王が筆頭、それからカール大帝、最後がゴドフロワ・ド・ブイヨンである⁹⁾。こうして、旅の一行にはこの偉人たちの面影が重なってもくる。

さてさらに、この9人の構成はデュメジルが述べた、3つの社会機能を含んでいる¹⁰⁾。すなわち、第1機能はガンダルフ、アラゴルン、第2機能はボロミア、レゴラス、ギムリ、第3機能はホビット、とくに庭師サムによって表わされる。9とは3の3倍である。3は印欧語族において重要な数であることはデュメジルなどによりつとに指摘されている。つまり、聖数を聖なる回数重ねているのである。それだけに、9人の幽鬼という数はおぞまし

く、その間には深さを増すことになるのかもしれない。この聖数を重ねた数の者たちが探索に赴くのだが、裂け谷までの旅の出だしは3人のホビットすなわち、フロド、サム、ピピンであった。章のタイトルも、‘Three is Company’となっている。途中でメリーが加わる。そして、ボロミアが死んで9人の旅の一行がばらばらになったとき、フロドとサムの2人だけになったように見える。しかし、フロドの旅は最後まで3人なのである。それは、グラムがつかず離れずこの2人を追っている上に、途中では案内人として2人を導いているからだ。こうしてフロドの探索は3-9-3という数字を基調に成し遂げられた。そして、聖杯の探索を成し遂げたのも、ガラハド、ボルス、パーシヴァルの3人であった。だが、ボルスのみが出発地のアーサーの宮廷に戻るのに対し、ここでは探求を成し遂げたフロドとサムの2人が救出されてホビット庄へ戻る。

フロド、サムに続いて選ばれた3人目の旅人ガンダルフは、賢者としてフロドを導き、指輪にまつわる様々な謎を解明していく。また、彼は一度死して、火と水により浄化され「灰色の放浪者」から「白の乗り手」として復活した。そして、聖杯探索においても常に賢者として騎士たちを教え導くのは、白のシト一派隠修士たちであり、悪魔は黒である。ただし、復活した白のガンダルフが導くのはフロドではなく、彼とは別行動になった戦士の一行である。

この点で、裏切りを行なった後のサルマンの衣装が、白からつかみ所のない玉虫色のようになったのは象徴的である。彼はもはや白たりえず、かといってサウロンの黒にもなりきれないエピゴーネンとして、どっちつかず

の状態になってしまったのである。聖杯探索の途上でボルスが見た白鳥と黒鳥の夢を彷彿とさせる。白鳥は外面は白いが内部は黒く、偽善を表わしていた。

IV. 愚者の成長

フロドに仕える庭師サムは、ガンダルフとフロドの話を盗み聞きした罰としてフロドの旅に同行することになった。しかし、彼は逆に、エルフを見られるかもしれないという期待に胸を弾ませて出発する。外の世界のことは何も知らない¹¹この初めはサンチョ・パンサのような滑稽で愚直な青年が、主人への愛ゆえに思いもよらぬ英雄行為を貫徹し、自分を知り、知恵を備えていくのである。ここには、外の世界から隔絶され、外界の知識を何も与えられぬままに「坊や」と呼ばれながら母親に育てられたパーシヴァルが、外界で様々なことを教えられ成長していき、遂には聖杯探索を成し遂げる姿が重なってくる。

だが、パーシヴァルが外界に出て行くのは、光り輝く美しい鎧を着た騎士に出会い、彼らを天使（もしくは神）と間違えた後で「騎士にしてくれる王様」を求めて、母の嘆きも死も構わず馬を飛ばして行ったときである。自ら外界を求めて出て行ったパーシヴァルとは対照的に、フロドとサムは冥王の送り込んだ黒の乗り手に追われて、逃避という形でホビット庄の外へ出て行くのである。

旅の一行と別れて、2人だけになった後グラムを手なづけ始めた頃、食料の残りを心配するサムにフロドはこう呼び掛ける。‘Samwise Gamgee, my dear hobbit -- indeed, Sam my dearest hobbit, friend of friends --’ (VI.286) .これまではただの‘Sam’であったものがここで‘Samwise’と呼ばれた。単純に

見ると、「賢いサム」になったわけである。しかし、*The Languages of Tolkien's Middle-earth* には、'Samwise (OE *sam*, *wis* 'half wise')' とある。また、*A Concise Anglo-Saxon Dictionary* で 'samwis' をひくと 'stupid, dull, foolish' という語義が与えられている¹²。つまり、「賢いサム」どころか「おばかさん」と言われているわけで、続くフロドの台詞を見てみるとその感じはより一層強まる。

'-- I do not think we need give thought to what comes after that. To *do the job* as you put it -- what hope is there that we ever shall? And if we do, who knows what will come of that? If the One goes into the Fire, and we are at hand? I ask you, Sam, are we ever likely to need bread again? I think not. If we can nurse our limbs to bring us to Mount Doom, that is all we can do. More than I can, I begin to feel.' (VI. 286-7)

滅びの山に着きさえすればいいので、その後は食べ物など必要ではないのだ、何を無駄な心配をしているのだ、と死を覚悟したフロドは言う。だからそんなことを心配するなんて「本当におばかさんだねえ」という親愛と慰めが混じった呼び掛けなのである。

ちなみに、Frodoの名は、*The Languages of Tolkien's Middle-earth* には、"OE *fród* 'wise', 'prudent', 'sage', *freoda* 'protector', 'defender', *freodo* 'peace', 'security'" といった語義が示されている。さらに *A Concise Anglo-Saxon Dictionary* では 'frod' の項に 'wise:

old [ON. *froðr*]' という語義が与えられており北欧語由来であることが分かる。ビルボが教えなければ目に一文字もなかったサムとは対照的な、教養ある悟りを開いた人物ということになるろうか。また 'freod' には 'peace, friendship: good-will, affection' の語義が与えられている。ここでフロドの名に示された、'defender' や 'peace', 'security', 'good-will, affection' といった語義にも注意したい。フロドがひたすらに指輪を捨てる旅を貫徹しようとしたのは、ひとえにホビット庄を救いたい、安泰に保ちたいという気持ちからであった (I. 67-68, VI. 376)。まさしく、エルロンドが探索前の会議で、「この探索の旅は、強者に勝るとも劣らぬ望みを抱いた弱者によってなされるかもしれぬ。しかし、世界の齒車を動かしてきた功業は、しばしばこのような過程をたどるものよ。大いなる者の目がよそを向いている時、小なる者の手が、やむにやまれずして、それをなし遂げるのだ。」(3.132) と言った通りになった。

では、さらにこのSamwiseという表現が出てくる箇所を検討してみよう。

IV. 313、ガンダルフの思いはアイゼンガルドでサルマンと相対している時でも、フロドとサムワイズの上にあった。

IV. 331、ファラミアに名乗りを上げるにあたっての、フロドの自己紹介の中で。

'Frodo son of Drogo is my name, and with me is Samwise son of Hamfast, a worthy hobbit in my service.'

IV. 336, 344、ファラミアたちの呼び掛け。

IV. 425 フロドがシェラブに殺されたと信じ、サムはガラドリエルの玻璃瓶を掲げて、知るはずのないエルフ語が口をついて出たあ

と、サムワイズに戻った。

IV.433 一旦我が身に引き受けた「探索」を放り出して、オークに攫われたフロドを追って行く。

IV.440 フロドを追いながら、頭の中で自分に語りかけている。

VI.210 指輪の誘惑が彼を犯しはじめる。心の中に広がる彼自身の姿。

'he saw Samwise the Strong, Hero of the Age, striding with a flaming sword across the darkened land, and armies flocking to his call as he marched to the overthrow of Barad-dûr.'

VI.375 船出するガラドリエルが、贈り物を上手に使ったとはめる。

ファラミアたちの呼び掛けは、フロドがそう紹介したのであるから当然であるが、それ以降の箇所では、サムが「サムワイズ」と呼ばれている時は彼の試練と変化の時である。サムはフロドが死んだと思い、あれこれと逡巡の果てに探索を我が身に引き受ける決意をする¹³。ブラッドリーはこう述べている。「フロドは指輪を手にしたとき、その恐るべき力については無知だった。サムはすべてを知っていて受け入れる。これこそ登場人物の心理的成長を物語る決定的な瞬間だ。」¹⁴しかし、実はフロドは生きていてオークに攫われたと分かるや、探索は棚上げして彼を助けに行く。この時サムは、〈一つの指輪〉を身につけている。そして、指輪の誘惑が彼を犯しはじめる。この時指輪が見せた彼の姿は、大天使ミカエルを思わせる。しかし、彼はそれに打ち勝つ。それどころか、彼はフロドを助け出すや、指輪を返すのである。ただし、「のろのろと」ではあったのだが。これは、最終的に

滅びの山の火口に来て、フロドが指輪を手放すことを拒否するのと較べると、たとえ所有期間がごく短いとはいえ驚くべきことである。そして、彼はフロドを追ひ求めながら、自分の居場所はフロドの傍ら以外にはないことを再確認する¹⁵。だからこそ、先にフロドは'Sam my dearest hobbit, friend of friends'と呼び掛けたのだ。

このようにガンダルフやエルロンド、ガラドリエルすら怖れた指輪の誘惑を果敢に断ち切ったサムは、ホビット庄に帰ったあとは復興に大活躍をする。まさしく、今度こそ彼は旅の間に培った自己についての洞察と知恵とを用いて「おばかさん」Sam (half) -wiseから「賢いサム」Sam-wiseになる。最後のガラドリエルの呼び掛けは、このように成長したサムを認めた呼び掛けである。ロスロリエンにいた時には、彼がこのような呼ばれることはなかった。彼の名が、もともとサムワイズだったのか、フロドの名付けでそうなったのかは良く分からない¹⁶。ファラミアへのフロドの自己紹介からすると正式な名なのかもしれない。追補Cに付いている系図には、ギャムジー家の方にはサムワイズとあり、コットン家の方にはサムと記されている。いずれにしても、指輪の旅、特に一時的とはいえ指輪を所有したことを通じて彼は大きく成長した。

V. 憐れみを知る

成長したのはサムに限らない。他のホビットたちもそれぞれに成長した。ピピンとメリーにいたっては、エントの水で文字通り成長した。だが、ここではフロドの成長について見てみたい。

フロドはかつてゴラムに情けをかけたビル

ボのことを恨めしく思って、ガンダルフにたしなめられた（I.65）。ゴラムのせいで、冥王がバギンズ家に〈一つの指輪〉があることを知ってしまったからである。彼が昔ゴラムを始末してくれていたなら、こんな厄介なことにならずにすんだのに、と。だが、ガンダルフはそれなればこそ、ビルボが指輪の「悪の害を受けること少なく、結局そこから逃れえたのは、かれが指輪の所有者となった時にそういう気持ちがあったからじゃ。情けがあったからじゃ。」（I.134）と言う。重ねてガンダルフは、「それにかれ[ゴラム]は指輪の運命にしかと結びつけられておる。わしの心の奥底で声がするのじゃ。善にしろ悪にしろ、かれには死ぬまでにまだ果たすべき役割があると。そしてその時が至れば、ビルボの情けは多くの者の運命を決することになるかもしれぬと——。少なからず、あんたの運命もな。」（I.135）と諭す。しかし、長い間フロドにはその情けが理解できない。

ところが、フロドもゴラムを間近に見て、ビルボと同じ気持ちを抱く（IV.275）。ファラミアらの隠れ家の下の滝つぼにゴラムがいるのを発見したという報告に、フロドは殺さずにいてくれ、と頼む（IV.368）。ガンダルフが、捕えたゴラムを預けたエルフたちにも禁じていたことだ、と言う。こうしたフロドの憐れみをサムはかつてのフロドと同様に理解できない。彼にとってはあくまでも、「くさいの」であり、うさんくさい「こそつき」でしかない。だが、滅びの山の火口に至ってフロドが指輪の破棄を翻したとき、ガンダルフが予想したようにゴラムが「まだ果たすべき役割」を果たす。彼は、フロドの指輪をはめた指ごと噛み切って、欣喜しながら火口へ転落する。かくして、フロドも憐れみを知り、

ゴラムに情けをかけた結果、最終的には当初の目的を果たすのである。彼がいなければ、指輪の破棄という偉業はなし得なかったかもしれないのだ。

フロドの憐れみはさらに、ホビット庄を破壊したサルマンにも向けられる。自分に刃を向けたサルマンの命すら救うのである。これにより、逆にサルマンの「復讐から甘美さを奪った。」彼は、フロドの「慈悲を憎む」（9.304）。こうしてフロドはサルマンの思惑を挫く。しかし、結局サルマンは手下の蛇の舌グリマ（彼もガンダルフとセオデン王の一種の慈悲によりローハンから追放された）に襲われ命を落とすが、その死もまたサウロンの滅亡とよく似ている。

ここでも、憐れみによって偉業を達成したパーシヴァルのことが思い浮かぶ。彼は初めに聖杯城へ来た時には、不具王の傷の苦しみについての質問を発することができず、王を癒すことができなかった。しかし、様々な試練を経て再び聖杯城に登城すると、聖杯に向かい王の苦しみが除かれるように祈ってから、「どこが痛むのですか」と尋ねる。この質問により王の傷は癒され、パーシヴァルは聖杯に現れた文字により王に指名される。

Ⅵ. 不具王

ところで、不具王は、その傷をいかにして受けたのか。クレティアン・ド・トロワによると、戦いで短槍で両腿の間を突かれ、その傷が痛むので馬に乘れないとある。また、散文の流布本系では抜く資格のない剣を抜いたために、懲罰として飛んできた槍に両腿の間を突かれ、ガラハドが聖杯城に来て、聖槍から流れ出る血を傷に塗るとたちまち癒された。ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハでは、

神の許さぬ愛を求めたために、異教徒の毒槍で両腿の間を突かれ、上述のようにパーシヴァルの質問により癒される。また、マロリーではバリンから聖槍で受けた傷のため、ガラハドによって癒されるまでは治らない。

抜く資格のない剣を抜いたために傷を受けるというモチーフは、アラゴルンがセオデン王の居城に入るに際し、愛剣アンドゥリルを預ける時に発した言葉‘Death shall come to any man that draws Elendil’s sword save Elendil’s heir’（Ⅲ.141）「エレンディルの世継ぎを除く何人たりと、エレンディルの剣を抜く者には死が訪れるだろう」（6.19）にその響きが見られる。

フロドは指輪を奪わんとする幽鬼の首領に刺され、さらに蜘蛛のシェラブに刺され、最後にゴラムに指輪をはめた指を噛みちぎられた¹⁷⁾。さらに指輪そのものが彼の精神に与えた傷である闇の記憶もある。こうして彼は癒えることのない傷を肉体にも精神にも背負うことになった。フロドは問う。‘Where shall I find rest?’（Ⅵ.325）またこうも言う。‘I tried to save the Shire, and it has been saved, but not for me.’（Ⅵ.376）自身が聖杯探索者ガラハドでもありパーシヴァルでもある不具王フロドには、癒し手たる者がいない。結局傷を抱えてエルフと共に西へ船出する。アーサー王が傷を抱えて妖精の島アヴァロンに運ばれて行ったように。そして、アーサーがそうであるごとく、フロドも西の彼方の永遠の地で傷を養うのであろう。

サムはフロドが眠っている様子をうち眺めて、彼の内部から光が出ているようなのに気がつく。幽鬼に刺された後、裂け谷で寝ていたときもそうだったが、ゴラムと3人の旅になった今はより一層はっきりと強くなった。

その様を見ながら、サムは‘I love him. He’s like that, and sometimes it shines through, somehow. But I love him, whether or no.’（Ⅳ.324）と己の立場を確認する。この光とは何であろうか。指輪の力が強まってくるにつれ、指輪に犯されぬフロドの精神の部分が外に現れたものであろうか。しかしまた、内部から光が射すように思えるという描写はエルフの描写に通じるものがある¹⁸⁾。フロドはエルフに近づいたのであろうか。それ故に、エルフたちが去るときには共に行くことになったのか。このことは、ファラミアの言葉によっても裏打ちされる。‘[T]here is something strange about you, Frodo, an *elvish* air, maybe.’（Ⅳ.344、斜体は筆者による。）また、シェロブに刺されたフロドを残して先に進もうとするサムが別れ際に見た彼の姿もやはりそうだった。

And for a moment he lifted up the Phial and looked down at his master, and the light burned gently now with the soft radiance of the evening-star in summer, and in that light Frodo’s face was fair of hue again, pale but beautiful with an *elvish* beauty, as of one who has long passed the shadows.（Ⅳ.430、斜体は筆者による）

ホビットとは思えぬ程に痩せてやつれたフロドが発するエルフのような光や美しさ。彼がこのような光を発するようになったのは、幽鬼に刺されて死の淵を彷徨いエルロンドの治療を受けてからである。ガンダルフはフロドの体、特に左手が透き通っているようなのに気がつく。

But to the wizard's eye there was a faint change, just a hint as it were of transparency, about him, and especially about the left hand that lay outside upon the coverlet.

'Still that must be expected,' said Gandalf to himself, 'He is not half through yet, and to what he will come in the end not even Elrond can fortell. Not to evil, I think. He may become like a glass filled with a clear light for eyes to see that can.' (II .215)

'Still that must be expected'とは、指輪が持主の寿命を引き延ばしながらその姿を次第に薄れさせていくのと同様な、幽鬼の刃による傷がフロドの体に及ぼした影響のことであろう。幽鬼の与えた傷がフロドを彼らの世界へ近付けるのだ。しかし、ガンダルフはその影響が悪い方へ向かうとは考えていない。むしろ 'He may become like a glass filled with a clear light' と考える。ここは日本語訳では「澄んだ光をたたえた杯」(1.20) となっている。フロド自身が光の器に例えられることで、彼自身が聖杯であるようにも思えてくる。その感覚が日本語訳では「杯」と言うことで、余計に強まる。

また、旅の一行がロスロリアンで貰った旅の糧食レンバスは、一枚で一日歩ける程の力を与えてくれる薄焼き菓子で、闇の者たちには触れることもできない。ゴラムも手にするのを嫌がった。これは不具王を生き延びさせた聖体を彷彿とさせる。そして、これにより旅の仲間、特にフロドたちはかろうじて命をつないでいったのである。

さて、不具王の回復とともに国土も回復す

るが、この物語の不具王たるフロドは癒されることがない。代わりに、フロドの半身たるサムが荒れたホビット庄回復を担うことになった。彼は、ガラドリエルから貰った贈り物を有効に使い、荒れ果てた土地を以前よりも豊かにする。その恵みは、植物のみか子供たちにも達した。その年に生まれた子供たちは、皆美しく金髪であった。こうして、愚直なサムはガラドリエルの土地への祝福を賢く用いてホビット庄をたてなおし庄長となる。ちょうどパーシヴァルが王となったように。さらに、彼は家庭を持つことで、ホビット庄にしつかりと根を下ろす。Ring-finderのビルボもRing-bearerのフロドも結婚して家庭を築くことはなかった。子沢山の平凡な結婚生活を通して、次の時代を築いて行くのはサムなのである。ビルボもフロドも結婚していないということは、不具王が両腿の間に受けた傷との関連が考えられる。これは、傷により生殖能力を奪われたことを示すと考えられている。不具王たるフロドには結婚して次世代を生むという道はないのだ。

VII. まとめ

*The Lord of the Rings*は北欧のサガやゲルマン伝説の『ニーベルンゲンの歌』などとの比較がよく指摘されている¹⁹。しかし、このように聖杯伝説との対応も考えられるということを示し、具体的に見てきた。そして、それはデイヴィッド・デイによると「聖杯探索は指輪探索の精神的側面を示すために選ばれた、中世キリスト教的な形なのだ」²⁰から当然のこととなる。トールキンが指輪の探索譚を逆転させたのなら、聖杯探索も逆転せざるをえないのである。そして、聖杯探索の騎士たちは指輪の旅の一行となり、サムにはパー

シヴァルの姿が、またフロドにはパーシヴァルとガラハド、さらに不具王の姿が重なっていた。かくして、指輪を捨てる旅は、裏返し
の聖杯探索となった。

注

- 1 使用したテキストは、J.R.R. Tolkien, *The Lord of the Rings, 1 The fellowship of the Ring*, George Allen & Unwin (Publishers) Ltd., 1954, 1977 ; 2 *The Two Towers*, George Allen & Unwin (Publishers) Ltd., 1954, 1979 ; 3 *The Return of the King*, George Allen & Unwin (Publishers) Ltd., 1955, 1979. 引用はこれによる。各巻は著者の巻分けに従いローマ数字で示し、ページ数を続け、I. 53などのように記した。日本語訳は『新版 指輪物語』瀬田貞二、田中明子訳（評論社 1992）文庫版を使用し、巻数、ページ数で示した。なお、旧版（昭和52）を参照した場合は、その旨を記した。
- 2 参照した聖杯探索のテキストは、クレティアン・ド・トロワ『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』天沢退二郎訳『フランス中世文学集2《愛と剣と》』（白水社 1991）、『作者不詳・中世フランス語散文物語 聖杯の探索』天沢退二郎訳（人文書院 1994）、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ『バルチヴァール』加倉井肅之、伊東泰治、馬場勝弥、小栗友一訳（郁文堂 1974）、*The Works of Sir Thomas Malory*, Third Edition, ed. Eugène Vinaver, rev. by P.J.C. Field, (Oxford: Clarendon Press, 1990), in 3 Vols. なお、ペルスヴァルおよびバルチヴァールの表記は、英語のパーシヴァルに統一して記した。
- 3 「裏返し
の聖杯探索」という点については、すでに天沢退二郎が「一種の反聖杯物語である」と指摘している。「トールキンの幻想世界」『幻想の解説』天沢退二郎（筑摩書房 1981）、p.102。また、宇月原晴明は「^{サ・ロード}主」という呪いにおいて、「逆転したアーサー王の聖杯探求譚だ」と指摘してい

るが、それ以上の検討はなされていない。『ユリイカ』4月臨時増刊号「『指輪物語』の世界ファンタジーの可能性」（2002）p.84。

- 4 このように、'quest'という語はわずかにしか使われてはいない。代わりに、'the / their journey'や'their way'などの旅そのものを表わす語が用いられている。Brian RoseburyはBk IV.において
は会話を除くと'quest'は一回しか使われていないと述べているが、見落としている箇所がある。
Tolkien: A Critical Assessment, (New York: St. Martin's Press, 1992), p.24.
- 5 ヨセフの幽閉と解放は、『ニコデモによる福音書』（『聖書外典偽典第6巻 新約外典I』、日本聖書学研究所編、教文館、1991、初版1976）によると、イエスの埋葬当日であるが、『主の復讐』では40年後のエルサレム陥落の時になる。ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』2 前田敬作、山口裕訳（人文書院 1984）p.169、横山安由美『中世アーサー王物語群におけるアリマタヤのヨセフ像の形成』（溪水社 2002）第2章、第3章。また、『聖杯の探索』では42年後にヨセフがエルサレムを出たと述べている。
- 6 ヨセフの一行が目指した地は、Avaronと記され、アーサー王が運ばれるAvalonとは綴りが異なるが、一般に同一視されている。
- 7 補遺Bの年表によると、スメアゴル＝ゴラムが指輪を手に入れたのが、第3紀2463年、指輪の破壊が3019年である。（Appendix B, 461, 472.）
- 8 「指輪の王」という表現は、まず裂け谷で目を覚ましたフロドにガンダルフが言う言葉の中に出てくる。'...; for the Black Riders are the Ringwraiths, the Nine Servants of the Lord of the Rings.' (I. 212)。次いで、ピピンが裂け谷でフロドのことを言ってガンダルフにたしなめられた時に出てくる。'Here is our noble cousin! Make way for Frodo, Lord of the Ring!' (II. 217) これに対しガンダルフは言う。

'Evil things do not come into this valley; but all the same we should not name them. The Lord of the Ring is not Frodo, but the master

of the Dark Tower of Mordor, whose power is again stretching out over the world! ...'
(II.217-18)

ガンダルフははっきりと「指輪の王」とは幽鬼の主人であり、モルドールの主のことであると言っている。だが、赤く燃える眼と、最後に消え失せる時にしかその姿らしきものは見えないサウロンが本当にこの本のタイトル・ロールであり、主人公なのだろうか。もやもやとした恐怖の影のみを振りまく姿のないタイトル・ロールというものがありうるのか。しかも、後者で使われているのは'the Lord of the Ring'という単数形であり、タイトルの複数形とは明らかに違う。すなわちここで話題になっている指輪'the Ring'とは〈一つの指輪〉のことであって、タイトルが指しているその他の指輪たち'the Rings'ではない。ファラミアは〈一つの指輪〉のことを知った時に、'the Ring of Rings' (IV.361) と言う。これは、'the King of Kings'という言葉がキリストを指すことと通底している。「指輪の中の指輪」とはすなわち「指輪の王」the Lord of the Ringsではないのか。また、それを所持する者を指す言葉であるとするなら、まさしくフロドは「指輪の王」なのであり、タイトル・ロールにふさわしい。よってこのタイトルは〈一つの指輪〉のことでもあり、またフロドのことでもあるように思える。その点からすると、日本語訳の『指輪物語』という題は実に良くできた訳であるといえる。

しかし、フロドがビルボの書の最後に記したタイトルは、'THE DOWNFALL OF THE LORD OF THE RINGS AND THE RETURN OF THE KING'である。上記の文脈で考えた場合、'THE DOWNFALL OF THE LORD OF THE RINGS'とは、サウロンの失墜のみか、文字通り〈一つの指輪〉の奈落への墜落・破滅であり、またフロドの衰えをも表わしているようにも思える。ちなみに、Mordorという名自体も、シンダリンの'Dark Country' (Ruth S. Noel, *The Languages of Tolkien's Middle-earth: A complete guide to all fourteen of the languages Tolkien in-*

vented, Boston: Houghton Mifflin Company, 1974, 1980) という意味だけではなく'mort d'or'、すなわち「金の(指輪の)破壊」を暗示しているのではなかろうか。

なお、赤井敏夫は『トールキン神話の世界』(人文書院、1994)において、このビルボの'the Red Book of Westmarch'を、その表紙が赤の革表紙で装丁された紳士録と同じことやホビット名家の系図学的記録でもあったことから「西境版名士録」としている(p.153)が、むしろこれはクロンマクノイズの聖キアラン修道院で1100年ごろ作られた『赤牛の書』*Lebor na hUidre*との関連を考えた方が、内容的にもふさわしく思える。この書は、赤牛の革で装丁されていることからこの名があり、主に歴史物語群や神話物語群、アルスター物語群からなっている。もしくは、より名前の似たウェールズの三題話の書'the Red Book of Hergest' (c.1400)との関連も考えられよう。よって、ビルボの書は従来の「赤表紙本」という訳で問題はないであろう。

- 9 *The Works of Sir Thomas Malory*, p.35. T.マロリー『アーサー王の死 中世文学集I』、W.キャクストン編、厨川文夫、圭子編訳(ちくま文庫: 筑摩書房 1986)、p.8。
- 10 ジョルジュ・デュメジル『神々の構造 ——印欧語族三区分イデオロギー——』松村一男訳(国文社 1987)
- 11 この点についてはフロドも同じであることは、赤井敏夫『トールキン神話の世界』第4章3節において指摘されている。
- 12 J. R. Clark Hall, *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*, Univ. of Toronto Press, 1984.
- 13 この辺りのサム心理的成長については、マリオン・ジマー・ブラッドリーが「人間と小さい人と英雄崇拜」の中で、みごとに解きあかしている。『ユリイカ』4月臨時増刊号『「指輪物語」の世界 ファンタジーの可能性』(2002) pp.127-141。特にp.135以降を参照。
- 14 同上、p.136。
- 15 II.294において、モリアの坑道に入るために馬のビルを手放さなくてはならない時に、サムは'I

had to choose, Mr Frodo, I had to come with you.'と悲しみを訴えつつ、主人の傍らにあることを選択した事実を確認する。

- 16 ピーター・ジャクソン監督の映画 *The Lord of the Rings* 第一部（2001）においては、盗み聞きをしたサムを掴まえた時点で、すでにガンダルフは「サムワイズ」と呼んでいる。監督が「サムワイズ」という名の意味を知っていてここで使ったのであるならば、ガンダルフは「この莫迦者のサムめ！」と言ったことになる。あるいはただ単に、「賢いサム」の愚かな行為を捕えて言ったのか、「サムワイズ」が正式な名と捉えていたのか、興味のあ
る所である。
- 17 ケルトの「三重の死」のモチーフを見ることが
できるかもしれない。これは、ある人物が異なる
死を3回経験することにより、思いもよらぬ予言
を遂行するというものである。実際、フロドはこ
のいずれの場合においても死と紙一重の状態であ
った。ただし、ここで遂行された予言は、彼の死
ではなく、指輪の破壊になる。
- 18 例えば、フロドたちホビット3人の一行が初め
てエルフと出会った時の描写。‘They bore no
lights, yet as they walked a shimmer, like the
light of the moon above the rim of the hills be-
fore it rises, seemed to fall about their feet.’
(I.83) .あるいは、グロールフィンデルを目に
したフロドには、‘it appeared that a white light
was shining through the form and raiment of the
rider, as if through a thin veil.’ (I.204) と映っ
た。
- 19 例えば、デイヴィッド・デイ『トールキン指輪
物語伝説』塩崎麻彩子訳（原書房、1996）。
- 20 同上、p.76。